

である。

五郎、素破こゝ御参なれつと、矢庭に聲を揚げて兄に打ち向ひ、

『鹿こそ参つておさるぞ』

二た聲、三聲、疾呼しつゝ、馬を驅つて、無二無三に其方へ近づく。

兄の十郎は、それと聞いて、

『此方にか？』

と、急ぎ弓に十三束の大の中差し押取つて打ち番へさま、聲する方に駆け出す。

此の時早く、二頭の牡鹿と一頭の牝鹿は、疾風の如くに、十郎の眼前を走り抜ける。

呀哉と思ふ間もなく、忽ち一騎の武者、それに續いて、走せ来る。

五郎と思ひきや、武者は敵の祐經。

十郎、思はず鞍上に躍り上がつて、さては、

時致の鹿とは是を指してぞと、喜色满面、

『アイヤ彼の鹿、埒の外に勢子を破つて落つるところを覺えておさる。追つ返へして進ぜるでおざらう』

叫びつ、走りつ、心の中に、矢所多しとはいへ奥野の狩の其の歸途、父の射られし鞍の山形の外れ、行脛の引合せ、報いを知らする怨みの一と矢に射止めて呉れんど、グルリ、敵を弓手に廻して、追つ立つる。

五郎も此の時同じく、中差し取つて打ち番へつゝ、左衛門が首の骨、如何に金鐵なればとて、なにしに志の通らざることやあると、鞭を鎧に添へて、右手に走せ並ぶ。

兄弟兩人、今や三頭の鹿と、祐經を中に押取り込めて、いよく急に追ひ迫る。

まこと工藤が命は、風前の燈火、



十郎、矢頃は宜しと、心の中に神を念じ、キリ、と弓を引き絞つて、放たんとす。——時しも祐經の運や暫時あつたりけん、十郎が乗つたる馬が、伏木に躓いて、前にバツタリ、のめる。十郎、鞍にも堪らず、筋斗うつて堂と地に落ちる。

『こは失敗つたり、無念な……』

ガツバと起き上がつて、ヒラリ馬に飛び乗り敵や何處と見し時は既に、流星光底逸長蛇。

祐經は遙か彼方に走せ去つて、又影もない。

兄弟、不覺の涙を呑んで、俱に相抱いて泣くこと暫時、胸中の無念さ、譬へん方もない。

さるほどに兩人、又も合して一つとなり、入目を避けつゝ再び、敵の所在を窺ふ。なれども不運にして、遂に又、出で逢はぬ。

(四六) 敵 の 屋 形

日は一日——二日——三日と、容赦なく暮れては明け、明けては暮れる。

兄弟の望みは、なかくに達せられぬ。狩くらは、遂に終つて、頼朝、明日は愈々、鎌倉へ歸るべく定まる。

十郎、五郎の兩人、此の沙汰を聞いて、かたみに其の不運を嘆じつゝ、泣き悲しむ。

『今日を過ぎなば、本意を遂げんこと、叶ひがたうおざります。是非に、今宵の中にこそ、事を遂ぐべきであざります』

『言ふにや及ぶ。我等が一命のあらんことも、今宵を限つてこそ』  
十郎、稍あつて、一人、屋形々々を見て歩く。討入りの便りにもと、思つてとある。



和田の屋形、畠山の屋形、屋形々々は、續き續いて、皆、定紋うつたる幕を引  
き廻して其の境を整然と劃る。

祐成、一つく見て行く中に、計らずも敵工藤の屋形を見出す。  
中には、今しも酒宴最中のこととて、人々の笑ひさざめく聲が、手に取るごと  
く聞える。

十郎、ソ幕の間より、覗いて見る。

祐經の嫡男犬房丸といふもの早くも是を見知つて、

『父上、十郎殿のおざりまします』

聲高に呼び立てる。

『さてこそ、敵に知られてか』

十郎、足早に此處を立ち去る。

左衛門尉祐經は、犬房丸の言葉を聞いて、

『ナニ、十郎殿とな。天野の十郎殿か、それとも横山の十郎殿にてか？』  
思はず聲をひそめて尋ねる。

『イヤ、曾我の十郎殿におざりまします』

『ホ、ウ、曾我の十郎とな。大方は酒宴の聲の羨まじさに、覗いて見たのでがな  
あらう。酒の一杯も饗應うて呉れんほどに、早々呼び返してやられ』

犬房丸、父の言ひ付けに、ハツと答へて、屋外に走せ出で、十郎に追ひ付いて言  
ふ。

『あれなるは工藤の屋形におざりまします。祐經、見参に入らばやと申されておざ  
りますれば、暫し、御立ち寄りめされて下され』

十郎一旦は、迷惑至極と思つたなれど、

『敵に言葉かけられて、今更尻込みせんも意氣地なし。幸ひ、是を便りに、祐經  
めが屋形のうちの案内を見て置くべけれ』



と思ひなほし、大膽にも、

『承はつておさる。早々参るほどに、御案内な下されい』

臆する氣色もなく、悠然、威儀を整へて、祐經の屋形の中に通る。

祐經は十郎の姿を見るや、手を舉げて、

『これへこそ参られ』

と應ねいで、自ら敷皮を直す。

『然らば……』

十郎、ひづとばかりに、それへ進み寄つて席に着く。

座には、一人の客があつて、祐經と對座し居る。その側に手越の少將と、黄瀬

川の龜鶴とが同じく侍り居る。

十郎は、去り氣なく四邊の様子を見廻しつゝ、先づ一通りの挨拶を終る。

祐經は稍あつて、容儀を更めつ、十郎に向つて言ふ。

『まことや、殿原兄弟、此の祐經を目して敵とやらん宣ふよし、我等、更々思ひ

も寄らぬことでおさる。さりながら、左様に申さるゝも、思へば、あながちに

由來なき次第でもおざらぬ、と申すは其の頃、我等が領すべき累代の所領をば

伊東入道殿押領おさつたにより、我等、六波羅に訴へたことおさつたなれど、

そは一旦の怨み事、其の儘に相成つておさる。然るに殿原の御父河津殿、伊豆

なる奥野の狩くらの其の歸途に、非命の御最後ばし、遂げられしところ、何の

故にか、それこそ此の祐經が所爲なれとて、罪科なき我等の郎黨を、殺められ

ておさる。祐經、折柄、都におさつたものを、何しに然る企てや致し得べき、

身に覺えとては、露ばかりも是なくおさつた。なれども河津殿の御最後は、一

遍に我等所爲と思ひ定められて、二なき郎黨ども、討つて捨てられておさる。

我等、それに就いて、恨なき次第ではおざらねど、第一に、入道殿は祐經が爲

めの養ひ父、第二に、伯父上、第三に、烏帽子親、第四に昔しの舅御、まつた



第五には、一族中の長者でおざるにより、何事も忍んでおざつたところ、幾ほどもなくして、其の後當將軍の御代となり、殿原の一家、皆御敵となつて、亡び失せられておざる。それやこれやに、殿原の御父河津殿の御最後は、ひたぶる祐經の所爲となり果て、思ひも寄らね、殿原兄弟に、敵よ／＼と深く恨まるゝに至つておざること、我等の身にもなりて見られ、なんぼうか口惜しの極みでおざる。此の事、ゆめ／＼人の言はるゝことを御用ひ召されな。讒言こそ、我等覺えておざれ。疾に御不審を霽らしてたまはれよ。祐經決して虚言は申さぬ心でおざる』

口に任せて言ふ言葉、十郎更に返答もせぬ。

(四七) 勝手を探る亂れ舞ひ

暫らくして、祐經ふたゝび口を開いて、對座の客を振返り／＼十郎に語る。

『これなる御人を、和殿見知られておざるか。備前國吉備津の宮の祠官にて、大藤内と申さるゝ、然る御人でおざる。今に七年、君の御不審を被むられ、所領を召されておざつた所、此度我等執成し申して、御免を得られ、所領安堵いたしておざるにより、祐經に名残りを惜まんとて、斯くは是へ參られて居らるゝのでおざる。斯様に異姓他人にすら宜きやうに計り申す祐經、身内の殿原の事共、何とて、おろそかに存じ申すことおざらうや。今よりは心置きなくこそ居らせられ。互の遺恨を止めて、いざ睦みの盃を一献いたすでおざらう』

大盃を舉げて、十郎にさす。

十郎心中に、あざけ笑ひながら、少しも色に出さず、  
『有難き御仰せ、何條さることのおざりませうや。一向に思ひも寄らぬことでおざりませう。先づ、御酒一つ、たまはるでおざりませう』  
さり氣なく盃を受けて、グツと一息に呑み干す。



祐經、此の體を見て、今は……と自ら心も解けたか、

『何ぞ御香に、一曲謠はせられ』

二人の遊女に命じながら、己れは盃を舉げて、頻りに呑む。

席に侍つた二人の遊女は、言葉の下に、扇拍子を打ちながら、

蓬萊山には千歳經る

千秋萬歳かさなれり

松の枝には鶴巢くひ

巖の上には龜あそぶ。

と、繰り返し今様を二遍まで謠ふ。

十郎、眼前に此の有様を見て、今こそ討つて捨づるに、宜き機會なれと、思はず血湧き、肉動いて、飛び掛からんとする。

『さりながら兄弟諸共にと契れるものを、我れ獨り敵を討つて果さんか、五郎の

怨みは、嗚や深かるべきを如何に……』

又思ひ返して、チツと逸る心を押し鎮める。

祐經、夢にもそれと知らねば、

『十郎殿は、聞ゆる亂れ拍子の上手と、承知いたしておさる。一とさし舞ひて見

せられ』

と所望する。

十郎流石に否みかねて、やをら持つたる扇をサツと開きつゝ、スツクリ立ち上

がつて

……  
君が住む、龜尾が山の瀧つ瀬は

と謠ひ出す。



心中に是を便宜に、屋形の中の様子を逐一知らんものと願へば、謠ひながらも千々に心を通はせて、兎やせん、斯くやせましと、思へば思はるゝ亂れ舞ひの手振、裾さばき。夜更けなば忍び入るべき道づたひ、茲より入つて彼所に廻る、彼處は詰つて、此處は通ひ路、忍んで入らば音あらし、入るとも知らじ差す腕、袖の返しに眼を使ひ、暫しが間、謠ひつ、舞ひつして、隈なく内部の様子を探る。

斯くとも知らぬ祐經は、

『さても美事の御手振り。疲れつらん、いま一献召させられ』

盃を突き付けて、呑ませんとする。

十郎、胸の思ひをひた隠しに隠しつゝ、さあらぬ體にもてなして、是を辭し、

『北條殿へ参るべき仔細もおざりまするほどにこれにて御暇つかまつる。明日こそ、重ねて、御邪魔をいたすべけれ』

人々の止むるを退けて、そこへに此處を立ち出づる。

(四八) 我れから洩らす祐經の悪

斯くて二た足三足ばかり行き過ぎた十郎祐成、フツと思ひ付けることのあるまゝに、ソツと傍の小柴垣の蔭に隠れて、中の様子を窺ふ。

中にてはそれとも知らず、大藤内が、

『好き殿振りの若人おざりまするのう』

と、何や彼や噂さの末、一段聲をひそめて、物語る氣勢。

『して貴殿、まこと彼れなる仁の御敵おざりまするか』

『如何にも……………』

祐經の聲である、

『彼等の祖父伊東入道と申す大の不心得者に、我等持つべき所領を押領せられ、かて、其の上、女房までも取り返へされておざるにより、年來の郎黨、大見小



藤太、八幡三郎なる二人のものに申し付けて、伊豆の奥野の狩場に射落させておさる』

『さればにこそ、貴殿を恨まるゝも道理おさるよ。あの眼の配りやう、物腰の運びやう、何となう異つてこそ覚えておざりまいた。よく／＼用心せられ』

『アツハツハツハツ、こは和殿にも似給はぬ臆病言、曲もなうおさるよ。彼等何ほどの事か仕出すでおざらう、諺にも、龍は寝て本體を現はし、人は酔うて本心を現はすとやら。盃擧げて、舞ひ狂ふ彼等、何の仔細もおさるまいテ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛』

罵りながら、念佛唱へて、はらり／＼と爪弾きする。

偶然とはいへ、此の念佛こそ、後に思ひ合すれば、おのが最後の念佛となりしとは、流石に祐經、神ならぬ身の知る由もない。

十郎、斯くと知つて、

『己れやれッ』

とばかり、躍り込んで、其の頬げた叩き破つて呉れんと、一時は思つたなれど、『イヤ／＼五郎もあるものを……』

と、忍び難きを忍んで、其の儘、音もなく、其處を立ち去る。

斯くて十郎祐成は、畠山次郎重忠の屋形に到つて、餘所ながら此の世の暇を告げんと思ひ、重忠の郎黨榛澤六郎成清を通じて、其旨を申し入れる。

重忠、もとより十郎兄弟の意中を知る故に、此の來訪を直ちにそれと覺つて、快よく對面する。

『如何に十郎殿、今宵ならずして、何時か御本意を遂げめさる。我等、豫てより殿原兄弟の御心中を察しておさるにより、心利きたる郎黨どもを添へて、御力を附け参らせんとは、思はざるにてもおざらぬなれど、さして勢の要るべきことにもおざらぬほどに、さてこそ差し控へておさる次第。さりながら今宵の御』



覺悟とあらば、夜中の働きゆゑ、屋形々の御案内も詳しう知らねば、御不自由も多おどらう。榛澤を連れて、今の中に、充分探つて御置きめされ。我等に遠慮は御無用。時おくれでは是非もなうおざれば、疾く御出でめされよ。十郎が、やがて暇を告げて立ち去らんとするや、重忠、その心を酌んで、今宵を大事とひたすらに力を附ける。

『さては我等の心中を既に見抜いておはすよ。日頃の恩義といひ今宵の厚意といひ、畠山殿の御志のほど、何時の世にかは忘れ得申すへや』  
嬉し涙に掻きくれて、十郎、有難く其の意を受け、榛澤を案内に屋形々の様子を事細かに知らんものを、再び外に立ち出づる。

(四九) 絨 ぢ ら し

トある丘の上に到るや、六郎成清、十郎を其傍に招いで、さて言ふ、

「拙者、此の所より、一と通り御案内いたすべければ、よく御胸に止めさせられよ。遙か彼方なる五月雨の小止む晴れ間に一際高く、北山に添うたる御屋形こそ、御承知にも候はん、一天はるか二十八宿、間取りむらなく打ち廻す籠龍の幔幕は、源二位殿の御座所でおさる。御屋形の左手に當つて、三つ鱗せし幔幕は、あれぞ桓武帝の後胤、常陸の大椽國香の末孫、當時鎌倉に時めく有様金龍の昇天なすばかりなる北條四郎時政。御屋形の右手に續いて、白地に三つ引龍は、虎も恐れる三浦九十三騎の大頭領、和田左衛尉義盛。後へ三十六間を離れて、玄武を象る龜甲に、黒の山道染出したる幔幕の假屋は愛甲の三郎維俊。續いて西に入相の月星出せし紫に、並んで白地に黒き馬二匹つなぎし定紋は、千葉が次男の相馬六郎。同じく東の上の方、出る日の丸に五本骨、招く扇の幕張は、佐竹の冠者義元でおさる。此の三頭の大名は、是皆源二位殿の御後を守護する假屋形。此方目の下に見えたるは、御屋形を守る前朱雀、夜明に近



き紅に、竹と雀の中村念齋。續く左の寄生木に鳩の八文字、紺地に黒く出したは、武藏の國に然る人ありと知られたる、士の頭の旗頭、熊谷の次郎直實。右手の幟に總黒へ、白く引き龍を見せたるは、里見の冠者の假屋でおざる。又、目の下に、一の木戸固め厳しき東なる方、打つたる幕張に花菱しげく出したるは、大内の冠者義廣。向ひの角に當つて、濃紅に第一大萬大吉と、白く抜いたる大幕は、石田の判官爲成でおざる。淺黄に白き釘抜と黒き釘抜出せるは、三浦が黨に勇猛の名も荒次郎義澄。立並べる柿色に、松川菱を付けたるは、三浦の平六義村。庵のうちに、雌龍雄龍を向ひ合して付けたるは、竹の下孫八左衛門。菱四つ寄せて菱なるは、武田の太郎信重屋形。一條板垣、下山邊見、南部仁科は一門にて、紋も同じき武田菱。紺地に日の丸の紋處は、寺尾の新田大炊の介。白一文字、黒一文字、淺黄の内にいせしは、須藤瀧口兄弟の屋形。大砂垣は安田の三郎。三階菱は加賀見の次郎。彼方木戸の塞際に、白地に左り巴

して、黒の山道つけたるは、關の東に勇名ある宇都の宮彌三郎友綱。右手の角に當つて、水色に仄めき渡る弓張月、露の玉ちる亂れ星の、綺羅びやかなる假屋は、あれぞ千葉の介常胤の屋形。此方赤地に五七の桐つけたは、拙者主人の嫡男畠山六郎重保殿。白地に賢き軍配は、兒玉の一族庄野の太郎。雨にふりよき二本笠は、その名も高き名古屋尾張の守。開き扇は淺利の與市。二つ瓶子は、川越の太郎。三つ瓶子は宇佐見の三郎。四つ大筋出したるは、金子の十郎近家。右まさ巴は、小山の判官。二つ巴は岡部の六彌太。三つ石疊は土屋の大學。四つ石疊は同じく次郎。淺黄に紺の水車は、土肥の彌太郎遠幸。御免と見えて總白へ、一文字を出したるは、久下權の頭の假屋でおざる。彼方、龍膽車は信田の小太郎。此方堅き三の木戸は、紺地に三つの大文字、二枚の矢筈を付けたるは、例の梶原源太景季の屋形。木戸の内なるは同じ紋に白地へ黒く出した父の平三げち々々の景時。斯く親子して前後を備へるは、もとより非常の爲



めと知られておぼる。それに續いて柿色に、いたら貝を出したは岩永左衛門宗連の屋形。六連錢の定紋は、彼の甲斐源氏の頭梁なる海野の小太郎幸氏。風折り烏帽子に立烏帽子は、比企の判官豊島の冠者。紺地に立浪出せしは、葛西の六郎清重でおぼる。あさら貝は安西の彌七。はなだの幕は横山の十郎。相馬に見紛ふ二匹馬は、仁田の四郎忠常おぼる。朽葉に菊をつけたるは、關の太郎と御知りめされ。割し桔梗は玉井の十郎。牡丹に獅子は、秋田の一流。白地に車を見せたるは、濱の龍王の末孫にて、齋藤一家。菊一文字は那須の與市。大文字は江戸の太郎。三つ巴は結城の七郎。花橋は山本の、柏木判官行元おぼる。澤瀉ながしは上總の介。引き龍交ひの定紋は、島津の冠者と覚えておぼる。劍花菱は小笠原。花劍菱は名取の八郎。山道に三筋出したるは、三島の入道荻野の五郎。龜甲輪交ひ雪折笹は、八田小野寺岩城の十郎。さて又此方、本營の左りなる向ひの角に、紫に白く四つ目を出したは、佐々木四郎左衛門丞大老高綱

おぼる。御屋形左りの假屋は、拙者主人、秩父鉢成花山の城主、畠山の次郎重忠殿。北條殿と向ひ合ひたる幕張は、足立の藤九郎盛長。和田殿と向ひ合ひたる白地に黒き山形の、庵のうちに木瓜を、染め出したるは、あれぞ和殿に要ある工藤左衛門尉祐經の屋形。以上、御胸にしかと止められて、必ず今宵の御首尾、吉左右のほどを、我等心よりして御祈り申すでおぼる』

心きゝたる榛澤六郎成清が、心を籠めて、屋形々々の様子を、いと詳らかに指し示して語り聞かせる。

十郎の喜びは如何ばかり。

『斯くまで御心を添へてたまはるからは、何條敵祐經を討ち損じ申すへ』

心の中に固く思ひ定めつゝ厚く禮を述べて其の儘に、

『あらば……』

と、己が屋形に立ち歸る。



(五〇) 闇深き五月雨の夜

斯くて此の事の次第を、弟の五郎にも具に語り聞けた兄の十郎は、既に見るべき處も見、訪ふべき人も訪へることとして、今は思ひ置くこと更になしとばかり兄弟共に直ちに死出の用意に取り掛る。

乃ち曾我なる母人の許へ、兄弟が一期の大事を思ひ立ちたる時分より、最後の今宵に至るまでの間の事共、何くれとなく書き記した涙の文を作る。

十郎、五郎、鬼王丸と道三郎の兩人を呼んで、それを持たして、曾我へ歸るべく命じる。

忠義に凝つたる二人の郎黨は、今宵の事の氣になる儘に、容易にそれを受けがはぬ。たゞ、

『許させられませぬ』

といふのみにて、ひたすら、討入りの供せんことを冀ふ。

兄弟、あはれとは思へど、斯くて止むべきことにあらねば、涙を振つて、態と叱り命じる。

鬼王、道三郎の兩人、遂になく／＼兄弟の遺書を懐にして、此處を去る。

まこと、去るも、去らるゝも、互の心は、たゞ涙である。

『今は後やすし。いざ然らば、最後の首途に赴かん』  
兄弟、茲に決死の身づくろひをする。

十郎は、下に、大磯の虎が脱いで贈れる綾の小袖を着け、上に群千鳥の直垂を纏うて、一寸まだらの烏帽子がけを強く掛けつ、赤銅造りの太刀に、箱根の別當が贈れる黒鞘巻の小刀を佩く。

五郎は、合の小袖の脇ぶかく搔いたを、狩場の用意にやせし、唐調布の直垂に蝶の散らし書きしたるを着て、紺の袴を着け、袖をば結んで肩にご懸ける。腰に



は兄と同じく箱根の別當が贈つた兵庫鎧の太刀を佩いて曾て敵祐經よりの引出物として贈られた赤木柄の短刀を差し添へる。

『時刻は宜きぞ。來れ五郎』

『言ふにや及ぶ兄者人。さらばにこそ』

兩人、養ひきむすんで、松明片手に、今を限りと立ち出づる。

實に建久四年、中夏二十日あまりの八日の夜のことである。

折柄、空は降りみ降らずみ五月雨の、あやめも分かぬ眞の闇、夜は沈々として更け渡る。

祐成は松明ふりあげて、

『五郎よ、此方へこそ向かれ。あかぬ別れの顔見せんに……』  
キラリと光る涙の眼元に、いざと眺めやる。

『此の上は、刹那の暇もあるまじければ、是をこそ我等が最後の見参よ』

五郎も心にそれと思へば、同じく松明を振り上げて、かたみに、熱々と、兄は弟は兄と、顔を打ち目成る。

是れぞ兄弟、逢ふ瀬の別れ、今生の暇乞ひと、互にはふり落つる涙の止めあへぬ。も、ことわり切めて哀れの極みである。

稍あつて五郎は、

『今は是までにおさる。御急ぎあれ兄者人よ』

心弱くて叶はじと、涙を袖に行かんとする。

情に脆き十郎も、今は………と思ひ切つて、

『さらば五郎よ。是を限りぞ。さりながら假屋の中には女共も多くあるべければ太刀の振り廻しに、心せられよ。罪作りに女ばし手に懸けんか、後日の沙汰も憚りあり』

戒しめ、警しめて、共に進み行く。



(五一) 悲 憤 の 涙

既にして兄弟、一の木戸に達する。當番の掛り役、早くも其の姿を見て内から聲を掛ける。

「何人にておはする。五つを打つての後は御通行罷りなり申さぬぞ」  
 兩人ハツと驚きながらも、早速に、

「これは土屋殿より、愛甲殿への至急の御使ひにおさる。御通行御許しあつても御答ある者ではおさらぬほどに、早々お通し下され」  
 巧に言ひ抜ける、

「ナニ、土屋殿より愛甲殿への至急の御使ひとな。然らば苦しうおさらぬ。お通りめされ」

當番の掛り役のものは、幸ひに些して怪しみもせず、兄弟の通行を許す。

兩人、ホツとして内に這入り、行くこと暫し。やがて二の木戸に差し懸る。

「アイヤ御門番、これなる處を御頼み申す」

「何人にておはすぞ。斯かる夜更けには、御通行罷成り申さぬでおさるが……」

「怪しうな者ではおさらぬ。我等身内方のものでおさる。お通しめされ」

「身内方のもの………？御名乗りめされ。何人にておはす」

「されば——身分輕きものにて、名乗るほどの苗字はおさらぬ」

木戸を開いて當番の掛り役一人、外に出で、暫し兩人の様子を見てあつたが、

「身内方と申さるゝ條、奇怪でおさらう。我等遂を見たことおさらぬぞ。お通し

申すこと、罷りならぬ。お退りめされ」

流石に怪しと見て取つたか、聲も荒らかにハタと戸を閉て切る。

氣早の五郎、斯くと見て大きに怒る。十郎目もて、

「騒ぐな」



と是を制しつゝ、虚事の數々、まことしやかに述べ立つて、ひたすらに通らんことを頼み入れる。

當番の掛り役のもの欺かられるとは露しらず、遂に其の不審を霽らしけん、やがて再び木戸を開いて兩人の通行を許す。

兄弟、ホツと一ト息して、

『やれ〜』

と胸なで下す。

斯くて二の木戸も事なく過ぎて、此度は、最後の三の木戸にと懸かる。

兩人、豫て畠山より貫ひし此の處通行の割符を所持したれば、是は難なく越す。

今は心やすし。兄弟、直ちに敵の屋形に颯と討ち入る。

まこと是ぞ十八年の天津風、今こそ吹き返す其の嬉しさに、兄弟たゞ〜顔見

合して莞爾と微笑むばかりである。

抜きそばめた太刀の光りは、振り照らす松明の光りと一つになつて、燈火仄暗き屋形のうちを、物凄くも稻妻と散る。夜は森々と更け渡つて、五月雨の音、ひとり蕭々と耳に入る。

兄弟は忍びに忍んで、遂に祐經の居間へ押し入る。

と、是は何としてぞ、居るべき筈の祐經はもとより、宵に見えたる大藤内も、遊君ごも、更に其の姿を見せぬ。

屋形や違へると、松明振り上げて、四邊を見るに、確かに、晝見し工藤の屋形に異らぬ。座敷も座敷、銚子土器の取り散してあるは、言はでも分る、晝の酒宴の其儘である。

兄弟は驚くといはんよりは、寧ろ、忙然として、暫しは、我れを忘れて、そこに行む。



稍あつて、ホツと熱き吐息を洩らした十郎五郎の兩人は、互に目と目を見合して、

『さてもく、武運の盡きし我等兄弟よな。今宵こそはと思ひしに、又しても敵を餘しつるこそ口惜しけれ。早、此の上は詮もなし。兄弟、此所に刺交へて、積る怨みの祐經をば、悪鬼ともなり、取り殺して呉れん。さなりく……』  
とばかり、悲憤の涙ハラ〜と滴しつ、手に手を取つて、泣く〜、屋外に立ち出づる。

(五二) 十八年の天津風

折柄、夜警の任に當つて、此所に來れる秩父の庄司、畠山重忠の郎黨に本田次郎親經といへるものがある。

あやめも分かね工藤の庭上にあたつて、何やらん動めく氣勢のする儘に、

『いかさま、盜賊ばらの忍び入つてけるよ。討ち取つて我等が功名手柄にせんものを……』

と、足音ひそめつ近寄つて窺ひ見るに、さても哀れや、盜賊ばらとは思ひも寄らね、曾我の兄弟が、折り重なつて、天を拜し地に俯しつ、泣き悲しみ居る様子。

『さては……』  
と早くも覺つた本田の次郎親經、ものをも言はで矢庭に扇を取り伸べて、是を招ぐ。

此方はそれと氣付いた兄弟のもの、

『何者なるぞ。招ぐは、必定、仔細のあるべし』

心しつゝも靜かに近寄つて見れば、思ひきや豫て見知り越しの本田の次郎親經である。

『こは是れ本田殿、何としてぞ』



思はず聲を揚げる。

親經は、シッ！、と制して、

『夜陰の名乗りは詮なきこと。浪に揺らるゝ沖つ舟の、知る邊の山は、此方にこそおざれ』

扇を舉げて、敵の所在を告げる情の一言。そのまゝに、スツと姿を闇中に掻き消す。

兄弟は、まこと、蘇生の思ひ、

『さては、敵は彼方ぞ』

心も勇めば、氣も振ふ。

ツカ／＼と、それへ進み寄つて、早速に棲戸をグイと引く。懸けたる掛鐵は五郎の大力に、苦もなくガツチリ折れて、下に落ちる。

兩人、得たりと、戸を開け放つて、中に躍り込む。

中には果して、目指す當の敵祐經が、今しも短檠仄暗きところに、白河夜舟の高軒、前後も知らずに、手越の少將と、枕を並べて、打ち伏して居る。少し後に退つた所に、是も同じく例の大藤内が、黄瀬川の龜鶴と共に添寝をして居る。

見るより喜色満面に溢れた弟の五郎、持つたる松明を振り捨て、矢庭に、敵に飛び掛らんとする。

『待たれ、五郎。眠れる敵を討つは。死せるものゝ、首を掻くにも同じぞ。起してこそは討取らんに……』

十郎、ツと其の袖を控へて、注意する。

五郎も、

『實にこそ……』

と合點いて、手早く添臥の少將を彼方に押遣り、ハツタと、敵の枕を蹴飛ばす。



「如何に左衛門、晝のほど見參に入りし曾我の祐成兄弟罷り参りしぞ。我等ほどの敵を持ちながら、何とて斯くは前後不覺に、寢入ることやある。起きよ左衛門。眼覺めよ祐經」

太刀取り直しつ、十郎、呼ばはる。

左衛門尉祐經、此の聲にハツと驚いて直ちに眼を覺ます。

「素破こそ襲はれたりな。心得たりツ」

やさしくも、流石に、ガバと跳ね起きさま、枕刀に手を掛けて、引き抜かんとする。

此の時早し、十郎の太刀は、一閃、バラツと祐經の左手の肩から、右手の脇の下まで切り下げる。

何條、もつて堪るべき、アツと一と聲、叫んで後へに堂とのけぞる。

と、續いて第二の五郎の太刀は、ブズーリ胸腰のあたりを、柄も通れと刺し貫

く。

左衛門尉、今は聲をも得立てず、其場にガツクリ、息絶える。鮮血、サツと迸ばしつて、凄慘の氣、四邊を罩める。

(五三) 闇にも光る太刀の刃え

此の物音に驚いて、眼を覺ました此方は大藤内、何事ぞと、寢寢け眼を擦りこすり見てあれば、南無三！曾我の殿原二人が、血刀提さげて、スツクと仁王立ちに突立ち居る様子、ハツと驚いて、周章狼狽、震へ聲に打ち叫びながら、逃げ出す。

「大藤内、人々を見知つてぞ。後日に於て兎角に争ふな」

十郎今は許さず、

「無用の痴言、吐く奴。逃げやうとて、己れ、逃しはせぬぞ」



追ひ絶つて、一太刀、サツクリと切りつける。

大藤内、キヤツと喚いて倒れながら猶ほも、四ツン這ひに這つて、逃げんとす

『笑止やな。未練者めツ』

五郎面倒なりと、あざみ笑ひつゝも、躍り掛かつて、兩の高股をば、バラリンズンと切り放す

馬は吼え牛は嘶くさかさまに

四十の男四ツになりけり

高らかに詠じて、五郎、呵々と大笑する。

『能くこそ仕つたれ。一期詠じても、よも是までには詠めまじ。秀歌に於ては、時致をこそ……』

十郎も共々に、今は憚かる所なしと、ドツと高笑ひして、屋外へ立ち出でんとす

る。

『祐經に止めを刺してか。止めは敵討つての法なるに……』

不圖、心づいて、十郎、五郎に言ふ。

『いかさま、止めは刺さいでおざつた。然らば……』

五郎、乃ち、取つて返へして、  
『左衛門殿、御邊の手より曾て賜はりし此の刀、今こそ御返へし申すでおさるぞ  
確かに御受取りめされよ』

柄も拳も通れとばかり、三度、突き刺す。

兄弟、斯くて、思ひ置くこと更になしと、等しく縁の上に突立ち上がつて、大  
音に事の次第を名乗りあげる。

『これは伊豆國の住人、伊東の次郎祐親が孫、曾我十郎祐成、同じく五郎時致と  
て、兄弟のもの。唯今、君の御屋形の前にて、親の敵工藤左衛門尉祐經を討ち



取つて、罷り出づる所なるぞ。我れと思はんほどの者は來つて討ち止め功名せよや」

代り／＼に二度、三度、繰り返す。

聲は闇を破つて、周圍に響けど、四隣、寂として更に音もない。

十郎、此の有様に、

「侍共の音するものなきこそ幸ひなれ。一と先づ、此の場を退ぞいて、今一度、母者人を見奉つた上、心静かに腹掻き切らんは如何に」

五郎に、さゝやく。時致聞いて、

「こは以ての外なる事はし宣ふものかな。此の期に及んで、さる女々しき振舞ひ何とて致されう。速かに御覺悟あつて、屍を名山の麓に曝し、名をば萬代に傳へたまへや」

色をなして、是を制する。

祐成も、さこそあらめと、茲に兄弟更に處を變へて又大音に名乗りを揚げつ出で合ふ人々あれかしと、太刀の目釘を濕してぞ待ち掛ける。

さるほどに、斯くと知つて、驚き眼覺めた工藤の郎黨どもは、

「事こそ曾我の人々の仕業なれ。ソレ討ち止めよ」

と、俄かに、ひらめき立つて、或は鎧一領に三人四人と取りついて引き合ふもあれば、或は繋げる儘の駒に飛び乗つて、一と鞭加へるもあるなど、散々の醜體を盡して、

「名乗れや、名乗れ。曾我のものどもは、何れにあるぞ」

とばかり、ドット喚いて屋外へ飛び出す。

「狼狽たる者共の振舞かな。曾我の兄弟ばら、父の敵を討つて、此の處に控へたり。掛かれや、如何に………」

凜々たる聲音は、闇の彼方より響いて、二刀の光りは、夜目にも著るく、人々の



目を射る。

(五四) 雨に色増す唐紅

「素破こそ敵は彼所なるぞ。遁すな。掛かれッ」  
一齋に、劔の垣を作つて、押取り圍む。

と、眞つ先に進んだる一人は、此の時早く彼の時遅し、五郎が振り翳した太刀の光りに、水も堪らず、首を打ち落される。

續いて掛かるを、右手左手三人五人、たゞ一刀に五郎が打つ放す。

兄の十郎も同じく、前後左右に敵を引き受けて、奮激突戦、一人も残さず打つ飛ばす。

斯かる所に武藏國の住人なる平子平馬允師重と言ふもの、白小袖に太刀ばかり押取つて、

「夜討ちどや。何者なれば、君の御前近くにて斯くは狼藉をいたすぞ。名乗れ、名乗れ」

と呼ばへりく走せ出づる。

十郎それと見るより直ちに聲かけて、

「曾我の冠者ばらが、親の敵を討つて出でたるを知らざるか。止めんとあらば止めて見よ。和殿の名は如何に」

と詰り問ふ。

「我れこそは武藏の國の住人平子平馬允師重なるわ」

名乗りも果てず、太刀を閃めかして打ち掛かる。

祐成、心得たりと、受け流して早速に斬り込む。平馬允、受け兼ねて、よろほひながら逃げ出す。

「穢なし。返せ」



罵り追うて、十郎、押付の外れ胛骨掛けて、一刀打ち込む。

平馬允、斬られながらも、命あつての物種と、太刀を杖ついて、立ちも返へらず、其の儘に引き退く。續いて、

「愛甲の三郎、是にあり」

と、勢こんで打つて掛るを、傍への五郎時致カラ〜と打ち笑ひ、

「御分達、相手に取つては不足なれど、今は人を選び申さぬ。曾我のものゝ手練を見たまへ」

切先より、鰐元まで血に染んだる一刀を眞ッ向に振り翳して飛び掛かる。

愛甲の三郎、薙刀取り直して、二た打三打驅け合したが、五郎の焦慮つて打ち込む太刀先に、丁と左手の肘を斬り付けられて、蒼くなつてぞ同じく引き退く。

第三番に、

「駿河の國の住人、岡部の三郎向つたり。出で合ひめされ」

名乗つて走せ来るを、十郎祐成、

「是にあり」

と言下に、太刀を閃めかして打ち合す。

岡部は大薙刀を、縦横無盡に振つてたゞ一と打と斬り進む。十郎、サツと身を落しざま、鋭ツと一聲叫んで切り上げれば、美ん事、薙刀は二つになつて、餘る力に左手の指を二本までバラリと切り拂ふ。岡部の三郎こは敵はじと、御陣の内

に逃げて入る。

逃げながら三郎聲を揚げて、

「敵は二人のみでおざるぞ。太くな騒ぎ給ひそ」

と大音に呼ばゝる。人々これを聞いて、

「天晴れ物見にこそ。流石は岡部殿よ」

ドツと笑つて、打ち稱す。



續いて遠江の國の住人、原の小次郎、

『我れこそ……』

と岡部に代つて打つて出る。

五郎、敵の付け入る太刀を引つ外して、サツと反對に斬り込めば、小次郎、體の開きや遅かりけん、兜の眉庇から鼻柱まで、したゝかに斬り割かれる。

續いて又、

『御所の黒彌吾を知らずや』

と切り込み來つたを、十郎、物をも言はず、太刀を振つて、スツと左に拂ふ。

切先は、丁とばかりに、その小鬘を割り付けたれば、黒彌吾、叱驚おどろいて脆くも横つ飛びに飛んで逃げる。

兄弟の勇氣は、一戦ごとに、益々加はる。當るを幸ひ、薙ぎ立て、斬り立て、四方八方縦横無盡に、阿修羅王の荒れたる如く、斬つて廻る。

(五五) 血潮に染まる兄弟

さるほどに伊勢の國の住人加藤彌太郎、大音あげて、物々しくも名乗りかけ、勢鋭く五郎に切つて掛かる。

時致、心得たりと、上段下段に暫しが間切り結んであつたが、頓て加藤のたいろぐ處を隙さず、二の腕かけて、颯と切り落す。

續いて、信濃の國の住人、海野小太郎幸氏馳せ來つて、無二無三に、十郎目掛けて討つて掛る。

駿河國の住人、船越八郎、同じく小太郎幸氏と相並んで、祐成に迫る。

十郎、二人を相手に、いつかな怯まず、奮戦激闘、右を撃ち、左を拂つて散々に駆け惱ます。

弟の五郎、斯くど見るより早く、忽ち横合から躍り掛かつて、冴ツと一聲叫び



も敢へず、一刀片手なぐりに、ハッシ、船越の猪首を打つ放す。

幸氏、これはと驚いて、思はず太刀先の狂ふところを、十郎、茲ぞとばかり、應と喚いて、丁どその膝頭のあたりを斬つ拂ふ。

幸氏、堪らず堂と音して、横ざまに倒れ伏す。

伊豆の國の住人、宇田小四郎、此の様を見て、餘りに言ひ甲斐なしとや思ひけん、

「小癩な冠者ばらが振舞よな。そこ動くなッ」

と、三尺五寸の大刀を真つ向に振り翳して、面も振らず、兄弟のものに突進する。

「いしくも申されたり。いざ、相手になつて遣はさん」

五郎、息をも吐かず、憂々、火花を散らして小四郎と太刀を合すれば、忽ちにして其の首は宙に飛び上がる。

雨は愈々しげくして、何時か、風さへおどろ／＼と吹き出す。陣々の松明提灯

は、一時に消え失せて、暗澹たる二十八日の夜は、いどゞ其の暗さを増す。

兄弟は、傍への小柴垣を後に取つて、出合ひがしらに斬つては落し、引き退いては敵を待つほどに、一人として、手に立つものはない。

屋形々々の騒ぎは、さながら鼎の沸くが如く、皆、上を下へと、ひしめき叫んで、喧々囂々、たゞ／＼互に罵り合ふのみである。

最後を急ぐ十郎は、やがて聲張り上げて、

「武藏、相模の名ある殿原は、如何しめされしぞ。我れと思はん重代の、太刀と刀の鐵の、鍛錬のほどを見せたまへ。相手は我等二人の兄弟のみであざるぞ

構へて後日に、十人、二十人と沙汰なしめされよ、さるにして燈火なくては、勝手に悪しうおざらんほどに、早々、火をこそ出さしめ。名乗り合つて、勝負

をいたさん。如何に……如何に……如何に……如何に……」



『それ道理……』

と御厩の舍人時武といふもの、氣轉を利かして、早速に傘に火を點けて投げ出す屋形々々のものども、是に倣らつて、各々それよ——とばかり、雜人ばらの傘はもとより、蓑笠に至るまで、皆、火を點けて、バラ／＼と投げ出す。

萬點の紅火、俄かに風に從つて燃え上がれば、四邊は恰かも萬燈會の如く、白晝よりも明らかとなる。

曾我の殿原は満身、朱に染つて、持つたる太刀の切先より、ポタリ／＼と血の滴を滴らす。

(五六) 憂々火花を散らす兩々の太刀

斯かる所へ、緋絨の腹巻姿、もの／＼しくも、薙刀取つて、ドツと十郎に押し懸かつたは、武藏國の住人、新合の荒四郎。

十郎、直ちに上段に構へて、ジリ／＼と立ち向ふ。

荒四郎、其の氣勢に臆して、

『御免あれ』

と、穢くも横つ飛びに逃げ出す。

十郎、見るより、

『緋絨の腹巻こそ目立つれ、返へせ〜』

と呼ばりつゝ、後追驅ける。

荒四郎、逃げ場に窮して、遂に小柴垣の裡に飛び込む。十郎、追付いて、其の尻をグツと刺し通す。

時に白糸の腹巻して、鐵棒を小脇に搔込みつゝ、

『如何なる痴者なれば、斯くは君の御前に於て、狼藉を働くぞ、名乗れ〜、何者なるぞ』



一人の武士、勢込んで進み来る。

五郎聞くより憤然として、其處へ躍り出でる。

「事新らしき問ひさまかな、曾我の兄弟ばら、父の敵を討つて出でたりと、幾度言ひしぞ。逆上せて耳の潰れしか。名乗れ、名乗れ。己れこそ、先づ名乗れ、聞かん」

罵しり返す言葉に、

「我れこそは甲斐國の住人、別野の別當の太夫が次男、同じく次郎忠光なれ」  
名乗りを聞いて、五郎、溢面つくりつ、

「さては田舎武士のへろ／＼よな。由緒ある武士と晴れの勝負を始めてなるべし  
曾我の時致、敵へて取らせん。いで、来いよ、忠光」

別野の次郎、躍氣となつて、

「己れが、己れが……」

とばかり、眞ッ赤になつて、たゞ一ト打ちと鐵棒を振り上げる。

五郎、得たりと、その下を搔潜つて、丁と太刀を引つ拂ふ。

忠光、鐵棒を下す暇なく、左右の高肢を斬られて、バツタリ、犬つく這ひに這ひ逃る。

掛かるものも、掛かるものも、皆、兩人の手に片つ端から、斬られ、薙ぎられして、散々になる。

折柄、又も降り増す五月雨に、燈火は明滅また明滅、遂に一時に消え盡す。

十郎は、此の隙にと、一ト息いれて傍へに佇ずむ折しも、蒨黄絨の鎧に小手脛當の装さびしく、大太刀取つて走せ來つたは伊豆國の住人、仁田の四郎忠常、

「如何に曾我の殿原、四郎忠常、上意に依つて是へ向つておさる。出で合ひたまへ。出で合ひたまへ」  
と叫ばはる。



十郎、此の聲に

『さては仁田の四郎殿にや。御分と祐成とは正しく親類の間柄にておさるぞ。互に後ばし見せたまふな』

つとそれへ躍り出す。

『言ふにや及ぶ。忠常が太刀、無道と怨みめさるな』

『沙汰は無益。我等、美しの最後を急いでおさつたなれど、未だ骨ある御人にも出で合はず、言ひ甲斐なき雑人ばらの手に掛かつて、死せんことかご口惜しう存じておさつた所。御分に逢へること嬉しけれ。祐成の首取つて、一族の好誼どころと思はれよ。さらば仁田殿、いざや、参るでおさるぞ』

オツと喚いて、十郎の太刀は闇に閃めく。

忠常、心得たりと、一ト足退つて、キツと受け流す。

兩々の太刀は、暫し、憂々として喰ひ合ふ。太刀先風を生じて、虚空に稻妻と

散る。双方、負けず劣らず。茲を先途と、必死になつて切り結び、受け流す。と、見る間に十郎、奮進躍進、呀ツと一聲掛けざま、サツクリ、仁田の小髪に割り付ける。續いて今一ト太刀、應と喚いて、丁とばかりに、此度は敵の小肘のあたりを斬り劈く。なれども流石は剛氣の忠常、流るゝ血汐を物ともせずして、猶ほも一心不亂に切り結ぶ。

(五七) 裾野の嵐

さるほどに、十郎の奮闘は、既に數刻に渡つて、人を斬ること數十人。劍霸は刀身を傳はる鮮血のために、手の中を繁く廻つて斬るも、突くも今は思ふに任せぬ。加ふるに身心綿の如くに疲勞したれば、思はず持つたる太刀をスパーリ、平目に打ち込む。何條、もつて堪るべき、ガツキと受けた四郎の刃に、流石の太刀



も、小手振ひして鑿元二三寸、ボツキと折れて、遙か彼方に散つて飛ぶ。  
 さらば——と十郎、殘る柄をば敵に投げつけ置いて、腰の小刀抜く手も見せず  
 忠常の切り込む太刀を、ガツチリ、受け留めんとする。と早くも、相手の太刀は  
 唸りを生じてズバツとばかり、祐成の膝頭に斬り込んだれば、今は堪らず、さし  
 もの十郎も、挫と音して尻居に倒れ伏す。  
 事は既に終る。四郎、其の儘に一刀の血を振つて立ち去らんとする。  
 祐成見るより苦しき聲を張り上げて、  
 『やれ待て仁田、など祐成の首打つて、上への見參には入れぬぞ。親しき者であ  
 りながら、此の儘にして立ち去るとは、餘りに情なし返せ忠常、首打て四郎』  
 悲痛の叫びは、仁田の肺肝を貫く。四郎、乃ち涙を振つて立ち戻る。  
 『昨日の味方は今日の敵、道ならねども忠常が、然らば介錯して參らすでおざら  
 う。言ひ殘さんことおざらば、心置きなく言ひ置いて、御腹をめされ。我等必』

らず、傳へて參らすでおざらう』  
 情ある一言に、十郎、嬉しの面持をしつゝ、  
 『仰せは有難けれど、今に及んで何の言ひ殘すこともおざらぬ。早々、首打つて  
 たまはれよ』  
 覺悟の姿美しく、念佛十遍ばかり唱へて、あはれにも、遂に富士野の露と消え失  
 せる。  
 四郎忠常、なくなく、其の首級を取つて涙ながらに名乗りをあげる。  
 『面々の方々聞き候へ。伊豆の國の住人、仁田の四郎忠常こそ、曾我の十郎祐成  
 を討ち取つたれ』  
 折節、弟の五郎は兄を離れて唯一人、目にも餘る寄手の亂群中に押取り圍まれて  
 あつたが斯くと聞くより、  
 『さては兄は既に討たれてか。切めては最後の一目をこそ』



と、引き返さんとする。

寄手の一人、東條の七郎、それを見て、

「逃ぐるな五郎。卑怯ぞッ」

とばかり、行らじとする。

五郎、邪魔だてするなと一聲叫びもあへず振向きざまに、バツサリ、大袈裟に打ッ放す。

七郎の弟同じく九郎、兄の敵と、むんづり引ッ組んで、振倒さんとする。

「エ、面倒なッ」

時致、左り手に九郎の上帯引ッ掴んで、曳やと揉み合ふ途端に、太刀を閃めかして切り込む行方の四郎を目がけて、ズバーリ、片手投に投げつける。東條九郎、眼くらんで、其の儘其處に落命する。

五郎當るを幸ひ、バツた、バタ／＼、阿修羅王の荒れたる如くになつて、斬り

倒し、薙ぎ倒して、一遍に、兄の許に赴かんとする。

なれども寄手は多勢を頼みに、續き續いて打ち掛るほどに、流石の五郎も、今は力あぐんで、茫然、太刀を眞ッ向に振り翳したまふ、スツクと立つて、それへ佇む。

さるほどに五郎時致、暫し、息を吐いたることにして、再び縦横無盡に太刀を振つて、押取り圍む亂群の寄せ手を突き崩しつ、斬り崩しつして、遂に漸く、兄の死骸間近まで押し進む。

見れば愛しの兄は、血汐に塗れて、倒れ伏したる無斬の有様に、五郎は氣も狂はんばかり。矢庭に兄の死骸を掻き抱いて、無言のうちに、たゞ、ホロリ／＼と咽び泣く。

「兄者人よ。死は諸共と約せしものを、さては此の太刀の折れに、仁田に後れ給ひしよな。追付、我等も御供いたさんほどに、暫しの間、待つてたまはれよ」



やがて、自から腹掻き切つて失せんとする。

(五八) 孝子の最後

折しも、

「五郎は何所へ行つたるぞや。兄が討たれしを見捨て、落ちたるか、未練なるぞ引き返へして勝負ないたせ。我れは鎌倉殿の御内にて、大豪の名を得たる碓氷の奥市といふものなり。返へせし、

と、いひつゝ名乗つて來たつ一人の武士、五郎、其處にありとも知らずして、通り過ぎんとする。

時致、聞くより怒り心頭に發して、

「兄祐成が討たれしを見捨て、何しに何處へか落つべき、兄は仁田の手に掛かつて失せたり。和殿は此の時致をこそ手に掛けて、首とれや」

突如、言下に太刀を揮つて飛び掛かる。

不意を喰つて奥市は叱驚仰天南無三、此處にかど、あたふた五郎の太刀下を掻潜つて逃げ出す。

「己れ、逃げやうとて、やはか、逃がすべき。言葉に似氣なき卑怯者ツ」

猪駄天走りに、何處までも追ひ驅ける。奥市、いよゝゝ驚いて、周章狼狽、逃げ場を失つて、遂に大幕打つたる頼朝の屋形の中に走り入る。

時致、續いて、例の血汐に染んだる太刀を引提げつゝ、鬢髪、逆しまに突立て、怒れる兩眼に、ハツタと周圍を睨め廻しつ、天魔魔神の荒れたらん如くになつて、追ひ進む。御前伺候の面々、一齊に立ち上がつて、何れも奥の間さして逃げ込む。

五郎、猶ほも、行かんとする所に、不圖目に入つた立姿の人影。何者ぞと見れば、薄衣引ッ被いで居るは確かに女人の姿である。



『さては女か』

深くも見定めず、其の儘に颯と通り過ぎる。

と、遣り過して置いて、矢庭にウームと組付く伴の女。

『邪魔ひさぐな。推参なり女郎』

五郎、事ともせず、ズル／＼ズルツと、引き摺り／＼、二三間ばかりも、與市の後を追ふ、女は、今は懸命、

『御所の五郎丸こそ、曾我の五郎を組み留めたれ。出で合ひめされ人々』  
呼ば／＼り、叫ぶ聲に、

『南無三！さては……』

と五郎時致、女と見せた五郎丸の腰帯引ツ掴んで組まれた我が身を引き解かんとする。

五郎丸、然はさせじと、曳々聲を出して必死に揉み合ふ。

十四五人の人々は五郎丸の聲に、

『ソレ通すな。組みしけッ』

と口々に呼ばはり／＼、時致に飛び掛かる。

五郎、無念の齒がみをなして、組み付く奴ばらを片ツ端から、引掴んでは投げ引掴んでは投げする人礫。暫しの間、金剛力を出して組んづ解れつ、揉み合つたが、椽の板や薄かりけん、ドツと板敷を踏み碎いて片足突込む。

得たりと飛び掛かる数人の面々は、我れも／＼と折り重なつて、手取り、足取り、遂にやう／＼にして繩を掛ける。

拔山、力盡きては蓋世の勇士、五郎時致も亦、如何にもすることを得ぬ。

茲に生捕の身となつて、翌二十九日、遂に、頼朝の面前へ引き出されて、直々に、その尋問を受ける。

時致、少しも臆する所なく、父、三郎祐泰横死の次第より、此度、敵、工藤左



衛門尉祐經を討つて捨つるに至れるまで十八年間の艱難辛苦、事體の理由を、一々漏らすところなく、整然と説いて、その由つて來れる所以のものを、一糸亂れず、縷々として陳述する。

頼朝、感激して、措くところを知らず、一遍に、其の一命を完ふせしめて、永く、その膝下に置いて愛さんとする。

さりながら、天下の法は、一片の私情を以て、左右することを得ぬ。乃ち、血涙を振つて、遂に、即月午の刻といふに、名も高き富士の高峰の山麓に於て、その首を斬る。

(五九) 嗚 呼 兄 弟

たらちめは斯かれとてしも育てけん

つゆけき野邊の土となる身を

建久四年癸巳五月二十八日、駿河國富士山麓井出屋形に於て、慈父の報恩の爲め、命を失ひ畢んぬ。

藤原祐成 生年二十二才

思はれよ花の姿を引き替へて

あらぬ形見を残すべしとは

藤原時致 生年二十才

建久四年癸巳五月二十八日、駿河國富士山麓井出屋形に於て、慈父の報恩の爲め、命を失ひ畢んぬ。

兄弟の遺書と、その首級は、やがて、前後して、曾我なる母滿江の手許に送り届けられて、茲に、懇ろに其菩提を弔はれる。

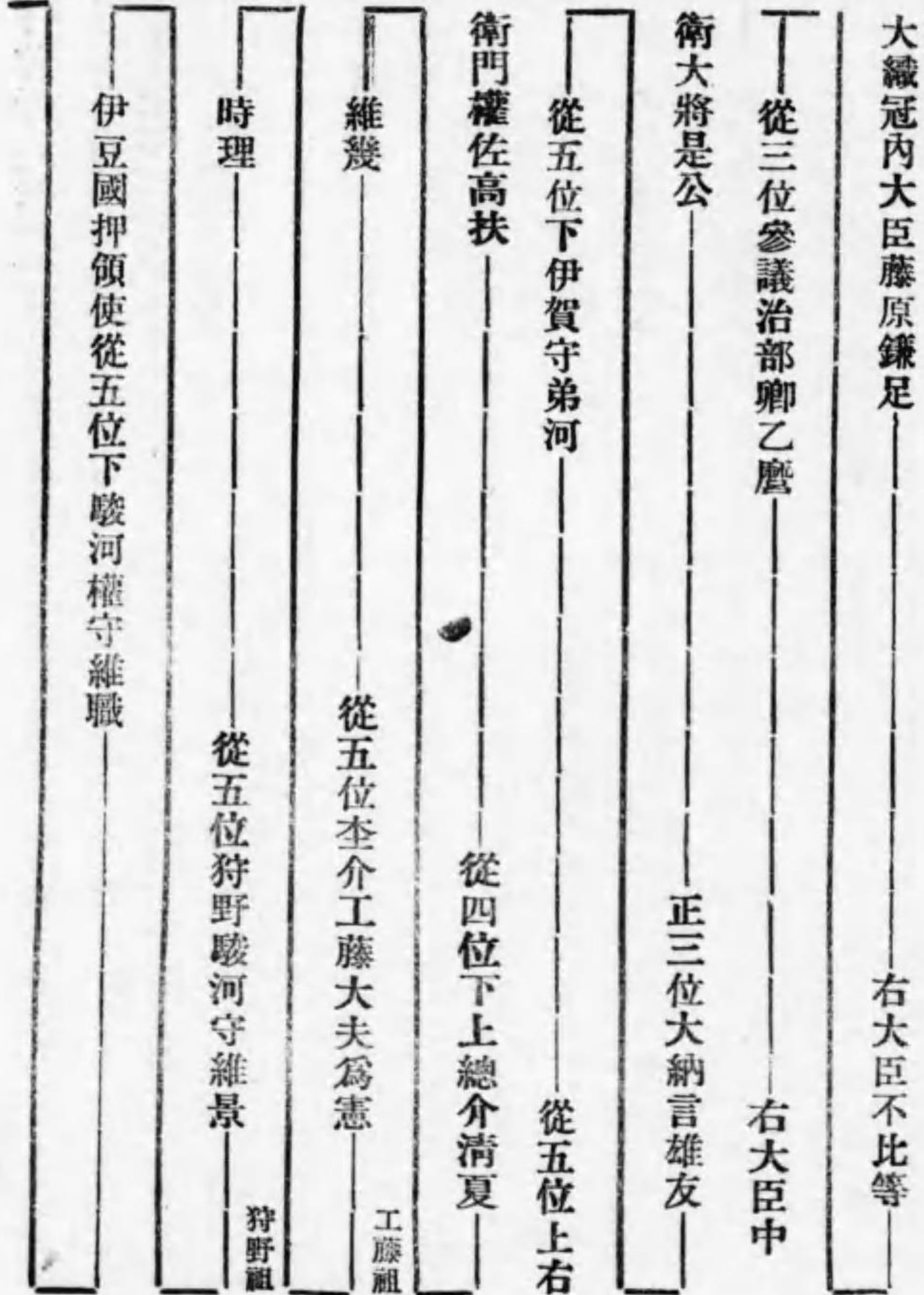
十郎の戀人、大磯の虎は又、兄弟が一期の本懐を達して、其人、既になしと知るや、未だうら若き十九の春を、此の世の名残りに、綠艶なすその黒髪を下して



名も禪修比丘尼と改め、出家沙門に身を委ねて、兄弟の後世を弔ふべく、日夜、看經供養を怠らずして、勤むること四十有餘年、嘉祿三年二月十三日、享年六十四才を最後として、遂に、目出度く大往生を遂げる。

日月、照らして天にあり。兄弟の孝にして烈なる。而うして其の末路の悲惨なる、千載の下、今猶ほ、感憤一掬の涙を注ぐもの、絶えざるは、まことに以て、その情の然らしむる處にあらずして、そも又、何物の能くなし能ふところであらうか。

伊 藤 氏 系 圖





狩野九郎維次

工藤大夫祐隆

法名寂心

太郎夫祐家

伊東武者祐隆の養子

伊東次郎祐親

祐繼

工藤一薦左衛門尉祐經

幼名金石丸

犬房

阿津三郎祐泰

女子

伊東九郎祐清

曾我十郎祐成幼名一萬

女子 三浦義澄の妻

曾我五郎時致幼名箱王

女子 初工藤祐經に嫁し  
後土肥彌太郎に遁く

御房伊東禪師

女子 初頼朝に通じて子鶴御前を  
生じ後江馬小四郎に嫁す

女子

(完)

昭和五年三月廿八日印刷  
昭和五年三月卅一日發行

定價壹圓貳拾錢



弟 兄 我 曾

東京市牛込區新小川町二丁目四番地

發行所 小林善八

東京市牛込區東五軒町三十番地

印刷者 下平敬一

〔刷印部刷印社藝文〕

發行所

東京市牛込區新小川町二丁目四番地  
(振替東京二二〇二番)

文 藝 社



# 國民叢書

◇小林鶯里著◇

四六判美裝・定價各四十錢(分賣)  
各冊百餘頁・送料各四錢(隨意)

文部省認定——茗溪會推薦の國家的良書！  
國民常識の源泉！ 知識の寶庫！ 家庭の必備書！

◇本叢書に對する讀賣新聞の批評

何も文部省が認定したから東京高師の茗溪會讀物調査部が採擇したから推薦すべき良書だといふのではな  
い。全く民衆大學の快絶な講座であり、國民常識の淵藪であるから、さういふのである。實に普遍で、通  
俗で、明確で、こゝろよい理解が、有ゆる専門學科に亘つて面白く與へられる。まづこの叢書さへ充分に  
熟讀すれば、大學や中學へ通學の出來ないことを苦にするにも及ぶまい。本叢書が續々と刊行せられるこ  
とは、たしかにわが國民文化の一大慶事である。「國民叢書」の名空しからずと云はればならぬ。

## 國民叢書

定價各四錢 送料各四錢 小冊百餘頁 各冊百餘頁

著里鶯林小

編八第	編七第	編六第	編五第	編四第	編三第	編二第	編一第
偉人の修養	日常科學の話	經濟學の知識	新聞を讀む基礎の知識	國民としての常識	立志より成功への近道	宗教早わかり	新しき修養
偉人英雄の裏面に隠れたる修養を選擇し面白く叙述したもの。	吾人日常の科學現象を詳述し、科學知識の普及を圖らんとしたものの。	經濟學の根本的原理を知らせ、併せて經濟全般を極めて通俗的に叙述したもの。	新聞を讀まざる者は一人もない、然るに基礎の知識なくしては解する事の出來ない事がある。本書はその基礎を説明したもの。	國民として必ず知らねばならぬ事を選んでは、解説を施したので、必ず一讀すべきもの。	早くものにならんとする人のため社會のあらゆる方面に亘つて立志より成功への近道を説明したもの。	世界の宗教中より十大宗教を選び、教祖、教義および現在の狀態を述べたもの。	困苦しき修養より脱して知らず識らず身を修めんとし、人の履むべき道を叙べたもの。

東京市牛車水區小川町二番四 文藝社 振替口座東京 二〇一一番



# 國民叢書

定價各四拾錢 送料各四錢 小鷹里著 四六判百餘頁 各冊讀切

第九編	第十編	第一編	第二編	第三編	第四編	第五編	第六編
哲學早わかり	新しき年中行事	藝術の話	思想善導	文化生活の基調	青年の進むべき道	論理學早わかり	野球の話
哲學に難解のものとする弊を補ふために平易に誰にも解るやうに述べたもの。	我國の風俗國民精神の表れともいふべき年中行事を叮嚀に解説したるもの。	藝術は人類に取つてなくてはならぬものである。本書は藝術全般に亘つて平易な解説を試みたもの。	思想善導の急務であることは多言を要しない。本書は平易にその目的を果さんとしたるもの。	文化生活の何ものをも辨へないものは上調子に流れようとする。本書はその基調を解し易く叙べたもの。	國家の中堅とも云ふべき青年が如何なる方面に進むべきかを述べたもの。	本書の如く平易に述べれば論理學も決して難解のものでない、誰にもわかる。	初めて野球をやる人のため、若くは野球を見よう人のために解り易く興味深く述べたもの。

東京市牛込區 文藝社 振替口座東京 二〇一〇番

# 國民叢書

定價各四拾錢 送料各四錢 小鷹里著 四六判百餘頁 各冊讀切

第七編	第八編	第九編	第十編	第一編	第二編	第三編	第四編
斯の如き人は成功する	心理學の話	婦人の進むべき道	理想の家庭	教育學の話	倫理學の話	平凡道徳	精神修養
古來の成功者中から成功すべき性質を抽象して述べたもの、成功者の福音。	心理學を平易に而も通俗的に叙述して國民一般に心理を了解させやうとしたもの。	婦人問題のやかましい折柄、婦人の進むべき道を明かにすることは何よりも大切である。本書は其れを説明したるもの。	有らゆる方面より考察して理想的家庭を建設する指導をなすもの。	今日では教育は教育者のみに委すべきときではない寧ろ一般人の心得べきものである。其れを詳述したるもの。	人倫の道に就てその概要を述べたもの、新時代に生きる者の心得べき大切な事柄である。	道は近きにあり、本書は平凡なものの中に眞理を認め吾々の行くべき道を示したるもの。	吾々の修養は數多あるが、先づ第一に精神の修養をはからなくてはならない。

東京市牛込區 文藝社 振替口座東京 二〇一〇番



# 國民叢書

定價各四拾錢 送料各四錢 小里著 六判百餘頁 各冊讀切

第五編	第六編	第七編	第八編	第九編	第十編	第一編	第二編
向上發展の基礎	佛陀の福音	基督の福音	無線電話早わかり	無線電話の知識	世界の格言と警句	家庭科學の話	普通選舉の話
吾々は向上し發展することが唯一の目的でなくてはならない。本書は向上發展の基礎を述べたもの。	釋迦の經典の中の最も大切なものを抄録したもので、日々の修養に好適である。キリストの言葉は新舊約全書にある、その中から代表的のものを選んだもの。	最近無線電話の進歩は著しいものである。本書は極めて平明に圖を多く入れて説明したものである。	無線電話に関するあらゆる方面の質疑に應答し、無線電話に関する凡てを明かにしたものである。	世界の格言と警句との中から精選してその粹を集めたもの。	日常生活に最も密接な自然現象の中での家庭生活に最も密接な常識的科學を説いたもの。	普通選舉法實施の今日國民たるものは何人も心得ておなくてはならない。本書は平易に解釋してあるから誰にも解る。	

東京市牛込區 文藝社 振替口座東京 二〇一〇二番

# 國民叢書

定價各四拾錢 送料各四錢 小里著 六判百餘頁 各冊讀切

第三編	第四編	第五編	第六編	第七編	第八編	第九編	第十編
政黨早わかり	貯金のすゝめ	音樂の知識	公民としての心得	成人教育の話	農村發展の基礎	日本地理の話	全國名所めぐり
一國の政治は政黨を度外視して考へる事は出来ない。本書は政黨に関する一般を述べたもの。	生活の安定は總ての根本である。本書は貯金に関する道を詳しく説いて一家の安全策を指導したものである。	音樂は最近著しい發展を示して來た。本書は音樂一般の知識を述べたもの。	公民教育の必要は現下一般の風潮である。本書は材料の選擇に十分の注意を拂つて公民の心得を述べたもの。	成人として缺くことの出来ない事項を平易に且つ明快に述べたもの。國民として知らねばならぬ事柄である。	農村の發展は國家の發展の因をなすものである。本書は根本的問題をとり農村的發展の基礎を述べたもの。	自分の國の地理を知らねば自分の家を知らぬと同様である。本書は日本地理の粹を抜いたものである。	わが國に名所は多い。本書は全國の名所を美的に表はせるもの、座作りに旅行気分が溢る。

東京市牛込區 文藝社 振替口座東京 二〇一〇二番



# 書叢民國

著里鶯林小 頁餘百判六四 錢拾四各價定 錢四各科送

編十第 八四	編十第 七四	編十第 六四	編十第 五四	編十第 四四	編十第 三四	編十第 二四	編十第 一四
西洋歴史の知識	東洋歴史の知識	日本歴史の知識	陸軍の知識	宇宙の秘密	科學萬能の世界	自然科學の進化	萬有科學の知識
前二書の姉妹篇である。歐米諸國の興亡を悉く小冊子にまとめたもの。	日本歴史の姉妹篇。百餘頁にまとめた所に本書の特色がある。	日本歴史の要點を集めて一冊とせるものゝかに要を得てゐるかは識者の認むるところ。	軍人に關すること、即ち帝國陸軍の總てを述べつくして遺憾ない。壯丁者の必讀書。	科學は進歩しても、宇宙にはなほ不可思議なる事柄が多い。本書は宇宙の秘密をさぐつたもの。	今日の世界に於て、いかに科學が力となつてゐるかを探り、解説を施したものの。	人類と密接な關係をもつ、自然界に於ける色々の現象の進化する有様を述べたもので、新人の必讀すべきもの。	二十世紀は實に科學の世界である。本書は、あらゆる方面から科學現象に通俗的な説明を加へたもの。

東京市牛込區 文藝社 振替口座東京 二〇一〇番

# 書叢民國

著里鶯林小 頁餘百判六四 錢拾四各價定 錢四各科送

編十第 六五	編十第 五五	編十第 四五	編十第 三五	編十第 二五	編十第 一五	編十第 九四	
メートル法の知識	實修商業簿記	商事要項	國文學史概要	文學概論	今日の歴史	明治大正の事蹟	
メートル法のあらゆる知識と尺貫法の換算表までもそへてある。	簿記の知識を明確に述べたもので、帳簿の整理は此一冊に依つて完全に満たすことが出来る。	商事要項に關する知識のエキスを百餘頁にまとめたもの。	國文學を味はふ者は、今日迄の國文學の變遷を知らなくてはならない。本書は上古からの國文學の概要を述べたもの。	文學全般に關する知識を簡単に而も要領よく平易に述べたもの。	東西兩洋の歴史的な事件を、三百六十五日その日その日に割り當て、一目にして知り得るやうにしたもの。	明治大正は新日本出現の時代である。その時代の重要事蹟を表示せるもの。	建國以來の重要な事件を精確に集めた年表で、極めて要を得てゐる。

東京市牛込區 文藝社 振替口座東京 二〇一〇番



# 國民叢書

定價各料四錢 著里鶯林小 頁餘百列六四 切讀冊各

編十第 編十第  
編六第 編五第

教育勅語謹解  
社會問題十講

教育勅語は我が國民道徳の根本である。國民たるものはこの聖旨を一日も忘れてはならぬ。本書は解し易くその義を述べた。文明の進歩は幾々の社會問題を伴ふものである。本書は今日の社會に於ける主要な問題を説いたもの。

## ◎文献賞受領 ◎毎月有益なるものを刊行す

新時代に生きるの誇りは「國民叢書」の愛讀者たることによつて得られる。

本叢書は豫約出版の様に窮屈なものにあらず。何人にも開放せられたる民衆大學講座である。読み度いと思ふ本を選んで、一冊でも二冊でも自由に読み得る寶庫である。而も難解なる性質のものに對しても、一讀了解の出来るように、説述せられたのが本叢書の特徴である。(自由選擇—幾冊にても分賣す)

東京市牛車橋區 文藝社 東京市牛車橋區 文藝社

# 國民叢書

定價各料四錢 著里鶯林小 頁餘百列六四 切讀冊各

編十第 編十第 編十第 編十第 十第 編十第 編十第 編十第  
編四第 編三第 編二第 編一第 編六第 編九第 編八第 編七第

憲法早わかり  
法律の知識  
陪審法早わかり  
佛敎入門  
國文法の知識  
修辭學の要領  
國語學の知識  
現代文學の輪廓

憲法は國家の寶典。國民は學つて一通りの知識をもつておなくてはならない。本書はわかりやすく憲法を解いたもの。  
法は國民生活に缺くことの出来ないもの。本書は日常生活に密接な法を説明せり。  
國民に與へられたる裁判權につきて、くわしく平易に説いたもの國民の必讀書。  
人類の存する所必ず宗教あり。佛敎は宗教中最も大きな力をもつもの、本書はその入門書。  
國文法に關する知識を整理したるもの。参考書としてもよき著述。  
修辭學に關する知識を平易に述べたもの。斯學研究の入門書として好適。  
國語學に關する知識を平易に述べたもの。一般の讀物として、参考書として好適。  
今日ほど文學の隆盛を極めてゐるときは過去に於て一寸見られない、本書はその概要を簡潔に述べたもの。

東京市牛車橋區 文藝社 東京市牛車橋區 文藝社



◦ 庫・文 大 の 前 空 ◦

# 萬有文庫

讀書の習慣は現代人修養の基礎である。然も世に其書は甚だ多いが其れ等に親しむ機会は餘りに乏しい。故に我「萬有文庫」は總てが書おろして、一切の學術に關する其き内容を平易に説く一方に、現代人必讀の文學、藝術は勿論、娯樂スポーツ、趣味一般に亘り、宇宙萬有と人生百般に關する知識と情操と、並びに若々しきセンセーションを包含する活きた學問の泉あり、清享な外装をもつて讀書家の自由選擇に任すのである。空前の計畫未曾有の便益書！

- |               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|
| (1) カント哲學物語   | (11) 雄辯術      | (21) 結婚の歴史    |
| (2) 戀愛の進化     | (12) 株式取引の話   | (22) 戀愛物語     |
| (3) マルクス資本論物語 | (13) 議會解散と普選  | (23) 新しい映畫の見方 |
| (4) 聖書の要領     | (14) 笑の心理學    | (24) モダンガール物語 |
| (5) 西洋傑作小説    | (15) ユーモア傑作集  | (25) 幽霊物語     |
| (6) 現代歐洲哲學物語  | (16) 日本神話     | (26) 星のローマン   |
| (7) 性とエデンの園   | (17) 希臘羅馬神話   | (27) 理想郷物語    |
| (8) 心の不思議     | (18) 接吻と歴史と技巧 | (28) 二重人格     |
| (9) 産兒制限の考察   | (19) 美人になる秘訣  | (29) 人類の起源    |
| (10) 西洋獨占     | (20) 性の常識     | (30) 百人一首早取法  |

ボケット形  
シヤレ本  
各冊讀切  
定價  
拾五錢  
送料二錢

◦ 京東座口替振 社 藝 文 區 込 牛 市 京 東  
番 二 〇 一 一 二 區 四 ノ 二 町 川 小 新

◦ 書 圖 價 廉 の 有 曾 未 ◦

# 世界文藝叢書

極めて廣き範圍の讀書人を満足せしむべき圖書を提供するには種々困難なる條件に遭遇する。その主なるものを擧ぐれば、一、極めて廉價に提供し得る圖書。二、文藝趣味を有する人、また然らざる人にも歡迎される圖書。三、外國語の素養ある人、また之なき人にも讀まる圖書。四、學生諸君又は一家・社會・國家の務めに多忙なる人に對し極めて僅かなる時間に於て趣味と實益とを供給し得らる圖書。五、永久に歡迎される圖書等。如上五項目は是非備へねばならぬ。本叢書發行の趣旨は、この五項目を基礎として、何人も知らねばならぬ世界の文藝上の傑作を廣く紹介せんとするにある。

- |                    |                         |
|--------------------|-------------------------|
| (1) ハムレット シェクスピア作  | (9) 悪魔の子分 ショウワ作         |
| (2) サロメ ワイルド作      | (10) 百人一首略解 藤原定家選       |
| (3) フアウストゲーテ作      | (11) 熊と犬 チエホフ作          |
| (4) ヴェニス商人 シェクスピア作 | (12) 武器と人 ショウワ作         |
| (5) 夜の宿 ゴリキイ作      | (13) 巴里 ソラ作             |
| (6) マカダズグアマン作      | (14) トリアングレ ワイルド作       |
| (7) 青い鳥 メーテルリンク作   | (15) 日本永代藏 井原西鶴作        |
| (8) 思ひ出 フェクス・テス作   | (16) ロメオとジュリエット シェクスピア作 |

袖珍形  
美製  
各冊讀切  
野音合便入  
定價  
參拾錢  
送料四錢

◦ 京東座口替振 社 藝 文 區 込 牛 市 京 東  
番 二 〇 一 一 二 區 四 ノ 二 町 川 小 新



書叢文作社藝文

著里鶯林小

- (1) 新撰書簡文
- (2) 口語體書簡文
- (3) 美文精選
- (4) 文章組立法
- (5) 叙事文と叙景文
- (6) 新しき記事文
- (7) 新しき紀行文
- (8) 新しき日記文
- (9) 新時代の論文
- (10) 小品文精選
- (11) 新撰儀式文
- (12) 名家文選

◎ 作文の評好参考書として評定あり

時代の推移はあらゆる方面に舊きを捨て、新しきに就く傾向を有してゐる。新しき時代には新しき時代の文學がある。著者はこの點について大いに鑑み、所があり、新時代に最も適合する作文書の體系を編むことに多量な注いで來た。かうして編まれたものが「文藝社作文選書」である。作文に關するあらゆる方面の知識は本書によつて充分に分得られることを確信する。殊に本書の詩りとする所は、定價の至廉なる點で、これは夙に文章報國をモットーとしてゐる我が社の一事業として一般諸賢の批判を仰がうとする所である。

◎ 學生諸君一般讀書家より白熱的歡迎

錢八料送 錢十六價定 册各 頁十六百各製上判六四

東京市牛込區 文藝社 振替口座東京 番二〇一一二

小林鶯里隨筆集

四六判函入 布裝美本 定價 壹圓五拾錢 送料 八錢



讀賣新聞は且て著者を千手觀音と評した。これは何を意味するか？著者の精力主義なることは世間周知の事である。

著者の精力と博識との結晶は即ち本書！

◇ 報知新聞評 別に題目を定めず思ひ付いた儘に閑談漫語をなすのが隨筆であるが、それに拘束せらるゝ所がなく、書くに人にも、讀む人にも快適の感と與ふるものである。本書は筆を執つては鬼神の如き鶯里氏の隨筆で、社會の各方面の事項に對し、或は考證的に、或は研究的に、或は諷刺的に、或は文藝的に、或は趣味的に、或はそれ／＼筆を馳せたものである。如何にもスツキリとした味のある文章である。

脊文字、扉文字、卷頭語には著者肉筆をそのまま表はしたるも趣きがある。

東京市牛込區 文藝社 振替口座東京 番二〇一一二



小林鶯里著

菊半裁判・洋装  
三百餘頁

定價壹圓廿錢  
送料八錢

(版重忽)

# 文章三百六十五言

◇作文の絶好参考書出づ。 雅趣横溢の良書出づ!!

美文麗句  
辭典

美文を以て夙に知られたる著者が、独自の筆致によつて、三百六十五日、その日その日に一つの題材を捕へ、自由自在に之を活描寫せるもの。作文研究者にとつて良指針であるは言ふまでもなく四季の行事、山水風月を知らんとする者には、又と得難き良書である。

小林鶯里著

〔最新刊〕

四六判、美装  
三百頁

定價壹圓貳拾錢  
送料八錢

# 文章春秋

珠玉の如き  
麗筆

春夏秋冬期節の移り行くにつれて、著者の五管に觸れるものは悉く、美文を以て之を表はし、麗句を以てこれを飾り、こゝに雅趣豊かなる美文寶典をなしたのである。ともすれば作文力の缺乏し勝ちなる現代の潮流に本書の出現を見たるは曉天の星の如き感あり。作文の資料とし、情操陶冶の材とし、且つは餘暇の讀物として絶好の書である。

振替口座東京  
二〇一〇番

文藝社

東京市牛込區  
新小川町二ノ四

振替口座東京  
二〇一〇番

文藝社

東京市牛込區  
新小川町二ノ四



◇るせと主を藝文の者讀◇

月刊 藝文 誌

[錢一料送・錢五拾貳價定・行發日一月毎]

◆文藝趣味の鼓吹 ◆純粹文藝の宣揚!

語標の誌本

◇埋木となるべき運命の作品を世に紹介して美しく花を咲かせようとするのです。  
◇あく迄讀者の雜誌として、誌上を讀者に開放し自由な文藝の花園を作らうとするのです。  
◇讀者の作品は絶対に尊重して必ずこれを掲載することに努めてゐます。  
◇定價はなるべく安くして、一人でも多く同好の士を得て、共々により高き藝術を作成しようとするのです。

◇每號懸賞募集(毎月十五日締切)

目種

○散文(抒情文・叙景文・叙事文) ○感想  
○短文 ○詩 ○童話 ○短歌 ○俳句  
○短篇小説 ○戯曲一幕物 ○好きな文章 ○讀後の感想 ○批評と感想 ○讀者の面影 ○讀者通信 ○其他

◆文藝愛好家唯一の投書機關雜誌。  
◆文藝に興味を持たる士は是非一本を――。

東京座口替振  
番二〇一一二

社藝文

區込市京東  
四ノ二町川小新



終



文藝社 東京